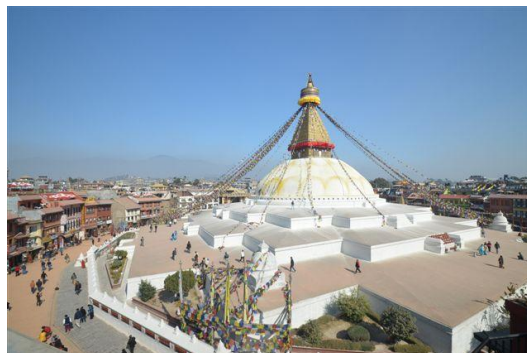


ネパール・スタディツアー2013

スタディツアーの概要

ネパール・スタディツアーへの参加は、2012年度で3年目となります。今年度は、8月の長期休業中に2名、1月の長期休業中に別の2名の生徒が参加しました。いずれの場合も、RASIC Aという秋田県内のNGOのメンバー2名が引率してくださいました。



8月実施のスタディツアー

RASIC Aが主催する「地球環境を考える——日本・アジア青年交流スタディツアー」に3年生女子生徒2名が参加しました。これは、地球環境問題について正しい知識を伝えるワークショップの手法を学ぶとともに、海外交流を通して相互理解を深め、地球環境問題に対する人材のネットワークを作ること



目的として、2012年7月31日～8月6日に6泊7日で実施されたものです。

生徒たちは、カトマンズ市内の児童保護施設や公立女子中高等学校での児童・生徒との交流、地球体験ワークショップへの参加、現地の人々とのGNH（国民総幸福量）に関する話し合いなどに参加しました。

1月実施のスタディツアー

青年海外協力隊秋田県OB会およびRASIC Aが主催するネパール・スタディツアーに3年生女子生徒2名が参加しました。これは、ネパールで行われている秋田の国際協力プロジェクトを視察し、国際協力への関心と理解を深めるとともに、学生とのアク



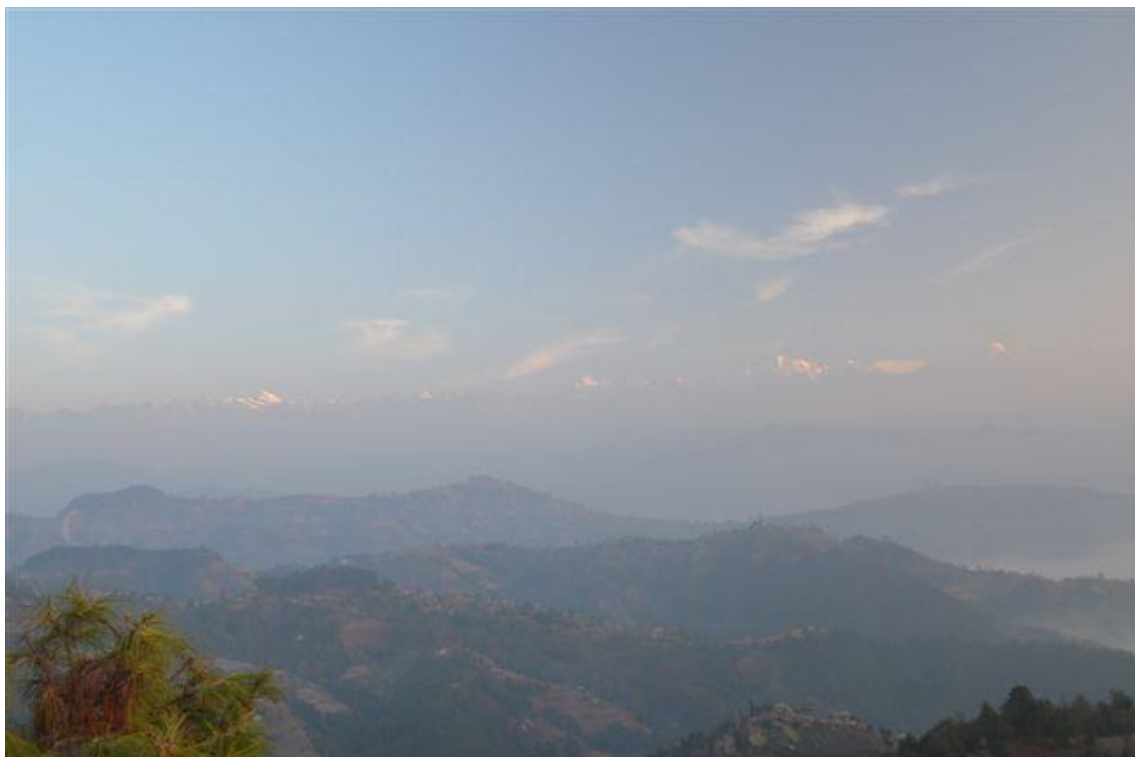
ティビティを通じた相互理解を図ることを目的として、2013年1月1日～1月7日に6泊7日で実施されたものです。

生徒たちは、夏のスタディツアーと同様に児童保護施設や公立女子中高等学校を訪問し、現地の子どもや女子生徒と交流したほか、農村に滞在して現地民族の暮らしを体験しました。

支援してくださった団体

こうした現地での活動は、主催団体のメンバーと共に事前に学習会を重ねていたため、円滑に実施することができました。これらのスタディツアーへの参加は、RASIC Aの協力に加えて、公益財団法人金子国際文化交流財団と青年海外協力隊秋田県OB会より助成金をいただいて実現しました。

この場を借りて、関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。



ヒマラヤ山脈を遠く望む

以下に、平成24年度にネパール・スタディツアーに参加した生徒4名の感想文を掲載します。

ユネスコスクール班に入ってから、以前考えていたように世界を知りたいというより、世界の子どもたちの笑顔に触れたいと思うようになった。ネパールへのスタディツアーは、この願望を叶える第一歩となった。

スタディツアー中、現地の孤児院を何度か訪れた。ここは両親か片親が刑務所に入ってしまった、行く当てのなくなってしまった子どもたちがいる施設だ。私は、こう説明されたとき戸惑った。どのように子どもたちに接していいのか。しかし、私の心情とは裏腹に子どもたちはぴょんぴょんと飛び跳ね、明るく迎えてくれた。子どもたちを見て最初に思ったのは、子どもは無邪気で、大人の顔色を見て行動し、素直でどこか残酷であるという私の子どもに対するイメージと、現地の子どもたちはかけ離れているということだった。子どもの顔をしている大人と接している気分になった。ここでは自分自身が童心に返っていて、とても楽しい時間を過ごした。だからこそ別れ際は、本当に辛かった。

この施設を訪れた人々は、去るとき「また訪れる」と言って去っていくが、再度ここを訪ねるといことは少ないようだ。しかし、「それでもいいから、子どもたちに会いに来てほしい、一緒に遊んで、一緒に話してほしい」と施設の方は言う。それだけ子どもたちは人の温もりに飢えているのだ。

この施設を訪れて、たくさん子どもたちと出会えて、縁について考えさせられた。私はこれから出会うであろう縁を大切にしたいと思ったとともに、こうして自分を受け入れ、求めてくれる縁からは、決して手を離すまいと帰り際に子どもたちと手をつないで歩いているときに確信した。世界平和を願うことも原発問題や環境問題について考えることも大切である。けれど、それ以上に人との出会い、縁を大切にしたいと思った。

そのあと私も、また訪れる約束を子どもたちと交わした。その瞬間、感極まり、つないでいた手を強く握りすぎてしまった。その時の、痛がりながらも嬉しそうにはにかんだ子どもの笑顔は忘れられない。

人はみな自分の靴のサイズでしか物事を計れない（ドイツのことわざより）

3年 成田 ひかり

目は見慣れた風景を前にしたとき、実は何も見ていなくて、でも全く知らない風景を前にしたとき、正確に把握しようとしてくれる。おかげで本当の美しい景色を見逃さずにすむ。というわけで、本当に正確な景色（五感で感じるものすべて）を見たかったので、なんの下調べもしないで、私は旅に出ることにした。ネパールがどこにあるかもわからず……。

ネパールでは私たちが持っている常識とは違う常識が存在する。たとえば、バイクは4・5人乗りが当たり前だし、タクシーやバスの定員は乗れるだけ乗って、それが定員だったり……。それから、生きるとか死ぬとかの距離が近い。それは、宗教的な問題（ヒンドゥー教）なのかも知れない。有るものすべてが神。道も木も石も川も全部全部。人は食べ物を食べる時、一口目を必ず床に落とす。道は食べ物だらけ。それは道が神様なので、お供えをしているのだろう。

私が会った子どもの中には、親が罪を犯してしまい、親戚も身よりもなく、孤児院的なところで生活している子どもがいた。親が出所してきたら、親元に引き取られる。中には親に売られる子もいる。親に対してどんなことを思っているのか聞いたかったが、さすがに聞くことはできない。部屋に通されたとき、「これが私の両親だよ」と写真を見せてくれた。「嫌いじゃないんだな。紹介するということはむしろ好きくらいなんだろう」と思った。一緒にネパールに行った人たちはかわいそうみたいなことを言っていたけれど、私はそうは思わなかった。普通に遊んでいるし、笑顔だった。不自由なことと不幸せなことは一緒ではない。不自由でも本人が幸せだと思えば幸せ。私から見たら、その子達は幸せそうに見えた。

結局、私たちが今まで必死にすり込まれてきた常識は、「20歳までにかき集めた偏見のコレクションだ」（アインシュタインの言葉より）と思う。テレビやネットや本や雑誌で言っていることに惑わされすぎていて、自分も周りも大人も子どもも何が嘘で何が本当かわからなくなっていた。でも、自分の枠からちょっと出て、今まで作ってきた常識とか、縛り付けられている感じを捨てて、誰かが作った情報に惑わされず、自分が見たもの、自分が感じたこと、それを自分の常識にしたい。

最後に一言。私はネパールが大好き、また行きたい。

ネパールで気づかされたこと

3年 釜田 知絵莉

ネパール・スタディツアーへの参加は自分を変えるチャンスだと思いました。私は、春から社会人になります。正直、このまま社会人になることに対する不安がたくさんありました。私は、会社に見合った人間なのかと考えてしまい、自信をなくすこともありました。その時、スタディツアーの話聞き、自分を違う視点から見直すチャンスだと思いました。そして、実際に7日間のツアーを体験して、自分に何が足りなかったのかを見つけることができたような気がします。

強く感じたことは、子どもの笑顔の可愛さは万国共通だということ。児童保護センターでたくさんのおもちゃと遊ぶ機会があり、皆とても明るく、初めて会ったにもかかわらず飛びついてきてくれたことに驚き、何て可愛いんだろうと思いました。しかし、彼らは親が刑務所にいる子どもたちなのです。笑顔の裏に、そんな孤独を持っていると思うと胸が痛くなりました。心から、この子どもたちの笑顔を守りたいと思いました。私が直接ネパールの不安定な政治を変えられるわけではないけれど、子どもたちが少しでも笑顔になれる方法はあると思います。そのうえで、言葉は大切なコミュニケーションツールだと感じました。伝えたいことがあっても伝えられない、伝えようとしている子どもの意をくめないもどかしさがあったからです。

一方、ネパールと日本の大きく違う点は、大切なものに対する価値観だと思いました。現地で同世代の女子校で「幸せ」に関するワークショップをしました。彼女たちは、純粋に家族を大切に思い、他人を尊敬しているのだと思いました。「他人の幸せが私の幸せ」と言っているのを聞き、私の足りなかったことはこれだったと気づかされました。

「人は、一人では生きていけない」。彼女たちはこのことを知っていました。一人で何でもできてしまう現代が、人と人の距離を遠ざけているような気がします。共存することで絆が生まれ、人として強くなれるのだと知りました。

今回のネパール・スタディツアーは私にとって初めての海外渡航でした。今まで見たこともない環境や文化に直接触れて自分が外の世界を知らなかったことを思い知らされました。ネパールは電力供給も不安定、水も不足、道路も舗装されていない所がたくさんあって、初めて見た時は衝撃の連続でした。同時に日本がどれだけ恵まれた環境で便利なのか身にしみて分かり、自分にとっての当たり前が誰かにとっては当たり前ではないことを強く感じました。でも、ネパールの人々は今の日本人にはない人と人との強い絆をもっていました。街を歩いていると日中は多くのネパール人が外で活動していることに気がつきました。外に出ると誰かがいてつながっている、そんな安心感が私にも伝わってきました。現地の女子校でGNH（国民幸福指数）のワークショップを行った時、ネパール人と日本人との幸福のとらえ方の違いに驚きました。ネパール人にとっての幸福とは「家族」や「友人」など誰かとのつながりを幸福に感じていることが多いのに対して、日本人にとっての幸福とは「お金」「家」「睡眠」「食事」のような他人を必要としない自分本位の回答だったことを思い出して悲しくなりました。ネパールは日本のように発展した国ではないけれど、ネパール人は日本人よりもずっと心が豊かで、幸せそうで、他人と共存しつつ生きられてうらやましいと思いました。日本は国の発展とともに大切な人とのつながりを忘れてしまっているのかもしれない。

帰国した今、私は英語の勉強を頑張っています。また、誰かと時間や経験を共有できる喜びを強く感じるようになりました。それはネパールに行って感じた言葉の壁やネパール人の強い絆を自分の目で見て来たからです。今回のスタディツアーでの体験は私にたくさんの影響を与えてくれました。ネパールで感じたこと、考えたこと、経験したことは全て、私にとっての宝物です。

私は4月から就職し、社会人になりますが、出会いを大切にすること、夢を持ち続け諦めないことを、社会人になっても忘れません。